

水曜通信21

東北学院宗教センター編

2022年
10月

LIFE

LIGHT

LOVE



布施淡画『東郊春色』
1891年制作
紙に水彩
14.7×24.8cm
本学図書館蔵



布施淡（ふせあわし 1873-1901）は1933年作の三校祖の肖像画を描いた布施信太郎（1899-1965）の父で、仙台における近代絵画のパイオニアでした。（4頁に続く）

呼ばれること、遣わされること

期せずして、宗教について考えなければならないような事件が続きました。最近読んだ本などの中で、社会から疎外された人々が「宗教」に逃げ、テロなどを通じて社会に報復するという構図でカルト問題や宗教テロリズムを説明しているものがあり、確かになるほどと思わされるものでした。

しかし、だからこそ、宗教とは何か、信仰とは何かをきちんと問わねばならないとも思われます。例えば、キリスト教の礼拝はどうでしょうか。私たちは礼拝の場へと呼ばれ、そこで安息を得て、そして再び世に送り出されるのです。つまり、礼拝とは社会と断絶するのではなく、かといって社会の中にあるのではなく、むしろ、社会の中であって一人で立つことができるように私たちに励ますものでもあるわけです。そこにあるのは宗教と社会の断絶などではなく、一人の迷える人間を受け止め、癒し、再起させる働きではないでしょうか。



東北学院宗教センター所員（大学宗教主任）田島 卓

次回：第56回水曜公開礼拝（公開オンライン礼拝）
11月2日配信予定

学校法人東北学院ホームページをご覧ください。

【第1部 礼拝】

説教：野村 信（宗教センターチャプレン）
奏楽：今井 奈緒子（大学教養学部教授）

【第2部 音楽による賛美】

演奏：今井 奈緒子



第55回 水曜公開礼拝報告（説教：藤野 雄大、奏楽：小野 なおみ）

2022年10月12日（水） 公開オンライン礼拝

讃美歌：280番「わが身のものぞみは」
聖書：創世記1章20-28節
讃美歌：187番「主よ、いのちのことばを」
説教：「SDGsな神の祝福」
頌栄：542番「よをこぞりて」



【説教要旨】

SDGsは「共生」と「持続可能性」を目標として掲げ、世界を一つの共同体と捉えている。この考え方は、新しいものではなく、実は聖書にも通じる。創世記第1章20節から28節までの箇所は、生物、海の生き物、鳥、地上の生き物、人類の創造が記されているが、ここには神の「祝福」という言葉が使われている（1章22節、28節）。神の祝福は、生命と結びつけられている。すべての命が、神の祝福の内にある。聖書は、神の祝福を通して、生命の尊厳を基礎付け、不変のものとしている。神が祝福された世界を、次世代に引き継いでいくこと、限りある資源を浪費しないことは、我々現代人の責務であり、聖書の言葉に耳を傾けることで示唆を得られる。

（文学部講師・大学宗教主任 藤野 雄大）

前奏：F. クープラン作曲《教区のためのミサ曲》“キリエ”より
「クロモルヌのレシ」
後奏：F. クープラン作曲《教区のためのミサ曲》“グロリア”より
「ブラン・ジュ」

フランソワ・クープランはフランスのバロック期を代表する作曲家です。音楽家一家に生まれ、ヴェルサイユ宮殿礼拝堂のオルガニストとなり、ルイ14世の治世に活躍しました。2つのオルガンミサ曲は最初の出版作品であり、聖歌隊とオルガンが交互に演奏することが想定されています。曲名は、ストップ（音色）の組み合わせを表しています。

（本学礼拝オルガニスト 小野 なおみ）



礼拝後、音楽による賛美（オルガン：小野 なおみ）

J. S. バッハ／《ノイマイスター・コラール集》より
「主なる神よ、いざ天の扉を開きたまえ BWV1092」
「心より慕いまつるイエスよ、汝いかなる罪を犯し BWV1093」
「ああ、主よ、哀れなる罪人われを BWV742」
「主よ、われらを汝の御言葉のもとに留めたまえ BWV1103」
「われ、心より汝を愛す、おお主よ BWV1115」



ドイツのオルガン学者、ヨハン・ゴットフリート・ノイマイスターが18世紀末に手書きで写した譜面（手稿譜）には、バッハやパッヘルベル、ツァッホといった82作品が載っていました。これらは最終的にアメリカの賛美歌作家、ローウェル・メイソンからアメリカのイェール大学に寄贈され、バッハの曲であると特定された36曲に新しくBWV番号が付けられた上で、バッハ生誕300年の1985年に、新バッハ全集のオルガン部門9巻として発行されました。この36曲はいずれも10代の作品とされており、礼拝で賛美歌を歌う前の前奏として用いることが出来ます。36曲それぞれが多様な形式を持つことから、若きバッハの才能と試行錯誤の様子が見て取れます。

（小野 なおみ）

秋季特別伝道礼拝が3年ぶりに再開！

今年再開した秋季特別伝道礼拝の講師は、三浦綾子記念文学館の特別研究員で、全国の三浦綾子読書会の顧問を務める森下辰衛氏です。2022年は奇しくも、三浦綾子の生誕100周年であり、当初、対面での実施予定日だった10月12日は彼女の命日です。題は「生まれてくれてありがとう」の奇蹟～三浦綾子を愛した男～。作家として文壇デビューする前、若き綾子は数々の大病に見舞われ、心はすさみ、絶望的な日々を過ごしていました。そんな彼女の前に現れたひとりのキリスト者の青年、前川正は綾子の病気の回復を願い、綾子と真摯に向き合いました…。文壇デビュー前の三浦綾子の魂の遍歴が自伝小説『道ありき』で詳細に記されています。今回、講師の森下氏がこの『道ありき』を活き活きと語り直し、コロナ禍等、試練の多い時代を生きる若い学生たちに、一人の人を真剣に愛することの尊さを語りかけてくれました。なお、森下氏とおし、三浦綾子読書会より『道ありき』を150冊寄贈していただきました。礼拝動画を視聴し、本書を読みたいと希望する学生たちに無料で贈呈します。各キャンパスの礼拝堂（会場教室）で希望者に配布する予定です。

（宗教センター主任〈大学宗教部長〉原田 浩司）



一 建築が語る東北学院の歴史 (13) 一

小誌前号で礼拝堂の四葉飾り/quatrefoilについて取り上げました。Jay H.モーガンの手になる本学の建築の中で、四葉飾りは唯一礼拝堂のみに見られる形です。一方、同じ「4」や「十字形」を想起させる図象の中には、複数の建物で共通して使用されている形を確認することができます。

例えば図1は、本館（1926）の玄関に続く階段室の上部に施された、カレッジ・ゴシックらしいレリーフの設計図です。また図2は、礼拝堂（1932）の祭壇脇に施されたレリーフの詳細図です。両者の関係は明白で、図1から対角線を除いたものが図2です。なお、この形は正門（1926）の上部にも認めることができるほか（図3）、礼拝堂のアイアン・グリル（図4）も、図2の変形（平行四辺形）によって出来上がっています。

キリスト教におけるX形（正方形の対角線）には、聖アンドロス十字という固有の名前があります。十二使徒のひとりで、X字形の十字架で処刑されたと言われる聖アンデレに由来するのだそうです。（工学部 崎山 俊雄）

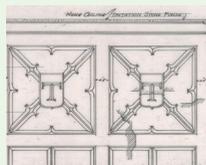


図1：本館の玄関上部のレリーフ

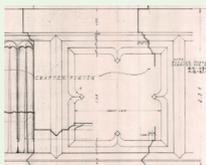


図2：礼拝堂の祭壇脇のレリーフ



図3：正門上部のレリーフ



図4：礼拝堂のアイアン・グリル

「宗教改革記念日（10月31日）によせて」

福音には、神の義が啓示されていますが、それは、始めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。（ローマの信徒への手紙第1章17節）

今月末に宗教改革記念日を迎えます。そこで宗教改革の発端となるマルティン・ルターの初期の活動について振り返っておきましょう。ルターは、ドイツのヴィッテンベルク大学の聖書学の教授として1512年から講義を開始しました。聖書を詳細に読み進めている内に「ローマ書」の講義にさしかかり、聖書に記されている「神の救い」、すなわち「福音」について、その深い意味に眼を開かされたのです。上載した聖句がその一つです。

聖書が行き渡っている現代から考えると不思議に聞こえますが、当時、聖書があまり読まれずにいたので、「神の救い」が曖昧になっていたのです。

ルターは22才で修道院に入って10年近く、神が人間を救うとはどのようなことか悩んでいましたが、聖書からはっきりと神の救いを知らされた時、「自分がまったく生まれ変わった」ような感動に包まれました。

この後、1517年に、ヨハン・ティツェルがヴィッテンベルクの近くに免償券を販売しに来た時、これに疑問を感じて、今まで抱えてきた問題も含めて「95ヶ条の論題」を掲示しました。それが10月31日とされています。

この論題には、当時のキリスト教に対する本質的な問題が含まれており、書き写されてヨーロッパ中に広がり、キリスト教刷新運動が起こりました。これを「宗教改革」と言い、プロテスタントと呼ばれる教会の群れが世界史の舞台に登場しました。プロテスタントの教会はヨーロッパからアメリカなど世界各地に広がり、本学も、アメリカのドイツ改革派と呼ばれるプロテスタントの宣教師たちによって創設されました。

（宗教センターチャブレン 野村 信）



ワルトブルク城。ここに籠ってルターは新約聖書をドイツ語へ翻訳

美術による賛美（15）布施淡（ふせ あわし）

布施淡（1873-1901）は仙台藩柳津の領主の家に生まれ、近代人たるべく、1890年に仙台教会で受洗、そして東北学院の前身の仙台神学校に入学しました。そこで画才が認められ、英語と洋画を教授することになり、その時期、島崎藤村と親しく交友しました。相馬黒光（1876-1955）も日曜学校での教師の彼に憧れました。その後東京で、工部美術学校に招かれたイタリア人画家フォンタネージ



『月山風景』キャンバスに油彩
【島崎藤村と東北学院】（2002年）より転載

の一番弟子であった小山正太郎（1857-1916）の画塾同舎で学んで、近代化を肯定する現実の風景を描きました。

1896年、仙台で美術の研究を目的に「青年美術会」を開設。まさに仙台における近代への憧れの体現者でした。

27歳で夭折したのは、惜しまれます。

（理事長特別補佐（宗教センター担当） 鐸木 道剛）



『自画像』キャンバスに油彩
【島崎藤村と東北学院】
（2002年）より転載



いのち

ひかり

あい

東北学院スクールモットー
LIFE LIGHT LOVE (いのち・ひかり・あい)

東北学院宗教センター編「水曜通信」
第21号

2022年10月12日発行

〒980-8511 仙台市青葉区土樋1-3-1

発行責任者：宗教センター主任 原田 浩司

東北学院宗教センター TEL：022-264-6558

Email：c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp